



# ストレス性疾患と漢方

大分市 織部内科クリニック  
織部 和宏



# 一般社団法人日本東洋医学会 利益相反(COI)開示

織部内科クリニック 織部 和宏

演題発表内容に関連し、発表者全員並びに発表者全員の配偶者、一親等の親族及び生計を共にする者に開示すべき利益相反(COI)関係にある企業などはありません。



## はじめに：①

各時代の医学の傾向はその時代に流行した疾病状況を反映していると思われる。

傷寒論が編纂されたA. D. 2－3世紀は中国だけではなく世界的に疫病が流行したようで感染症の診断と治療に当時の医学のエネルギーの大半が注がれたと思われる。

さて江戸中期に活躍した和田東郭は確かに感染症も診ていたが、むしろ「肝うつ」が多いとして今で言う心療内科的立場で「諭説」をおこない又傷寒論の本来は感染症用の方剤である四逆散をはじめ、加味を工夫して色々の漢方治療をこの「肝うつ」に対して施して素晴らしい成績をあげている。



## はじめに：②

ひるがえって現在の我々の置かれている状況を見ていると、世界的には文明間の考え方の違いによる衝突（アメリカのイラク攻撃、テロリズム、北朝鮮の核開発疑惑等）世界的な不況、水やエネルギーの問題、我が国においては止めようもないデフレの進行、リストラ、犯罪の増加、将来に対する希望のなさ等、我々の医療界も含め多くの社会不安をかかえる現在はまさに東郭の言う所の一億総「肝うつの時代」と言って良い。



## はじめに：③

東洋医学はインフルエンザ等の種々の感染症に対しても素晴らしい有効性を発揮していることは日頃からよく経験のある所だが同時にストレス性疾患に対しても西洋医学とは違う方法論で十分対応出来るものと確信している。  
今回はこのような立場より試みた漢方治療に話をしぼって報告する。



# 私の漢方医学的原則

- A : 日本漢方の古方派（現在では大塚敬節先生や山田光胤先生）の方法論に基づき診断し処方決定する。
- B : 後世派の処方も古方派の方法論に因って使用する。
- C : 具体的には
  - 病位（表、半表半裏、裏）
  - 病期（太陽病、少陽病、陽明病、太陰病、少陰病、厥陰病）
  - 病勢、病性（虚実、寒熱、燥、湿）
  - 金匱要略の病型分類で診断し方剤を決定する。



## ストレス性疾患

和田東郭が「蕉窓雑話」など述べている方法論を加えて使用薬剤を選択する。場合によっては中医学的な五臓六腑論も参考にする。  
非薬物療法としては和田東郭や今泉玄祐の説諭や移精変気の法も試みしてみる。



## 後世に伝えたい処方

A : 柴胡加竜骨牡蛎湯 加味

B : 四逆散 加味

C : 加味逍遙散 加味

D : 抑肝散 加味

他、エキス剤でも十分に対応出来るケースも多々あるが「もひとつだなあ」という例に合方あるいは生薬をいくつか加味するとドラマチックに効果が増すことがあるのでその場合は、煎じ薬を使用している。





# A. 柴胡加竜骨牡蛎湯例

症例 1 中〇〇 63才 男性

主 訴 : 不眠、胸苦しさ、血圧が高く首肩が凝る

既往歴 : 30才頃 胃潰瘍

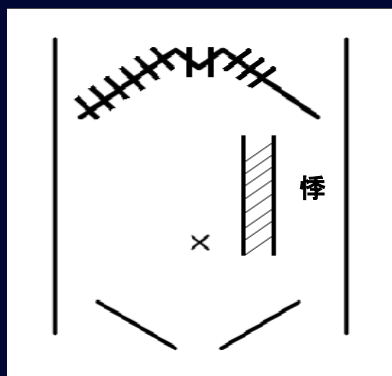
現病歴 : 以前より神経質な性格で、少しでも気になる事があると不眠傾向にあったが、平成12年8月に妻と旅行し、ささいなことで喧嘩したのをきっかけに増々入眠が悪くなり、浅眠、多夢、小さな物音ですぐ覚醒するようになり日中はイライラして血圧が上昇、頸や肩が凝り、頭重感が持続、胸苦しさも出現した為、平成×年10月18日当院を受診。



# 症例 1

**現症**：体格栄養状態 良好、食欲は変わりなし。便は便秘と下痢を繰り返す。脈84/分、沈弦、舌は紅舌で白苔、血圧 162/100mmHg

**腹診**：



腹力、中等度以上で右に胸脇苦満  
臍上～傍悸。

**漢方的診断**

病位・病期

半表半裏、少陽病

病勢

実証

薬方

柴胡加竜骨牡蛎湯



# 症例 1

**経過**：以上より腹証も参考にして、柴胡加竜骨牡蛎湯加  
・根3.0、黄連1.5、釣藤3.0を煎薬で投与した。  
一週後は気分が少しずつ楽になりイライラ感、頭重感、  
肩凝り軽減、大部眠れる。 血圧142/80  
「先生に言っていなかったが胃もちよくちよく痛んでいた。」  
と言うので、前方加・薬3.0、甘草2.0を追加。  
三週後、頭重感、胸苦しき、不眠、腹痛すべて改善  
「気分がすごく楽になった」と言う。 血圧136/80  
以後、継服して体調は心身共に極めて良好で血圧130/80  
前後にコントロールされ「夫婦仲もお陰で良くなりました。」  
との事。



# A. 柴胡加竜骨牡蛎湯例

症例2 古○■○ 63才 男性

主訴：頻脈発作と精神不安

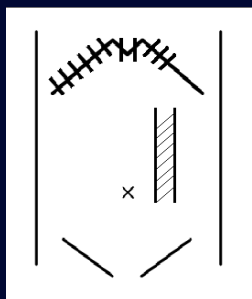
現病歴：平成×年11月末、急性心筋梗塞にて居住地の県立病院循環器科に入院、PTCAを受け、心筋梗塞はよくなったが、その後度々頻脈性心房細動となり種々の薬剤で改善しない為、2年後、1月にはカウンターショックを施行されたが一時的ですぐ再発。この一週間は100～120/分の頻脈性心房細動が持続し胸苦しく今にも死にそうな感じで不安で居ても立ってもおれなく同年2月22日当院を受診した。



## 症例 2

**現症：** 体格、栄養状態は良好だが不安そうで落ち着きのない顔貌。  
食欲は不良。睡眠は不安のためすぐ醒める。二便は良好。  
脈100~110/分、結代。血圧 162/80、舌、紅舌、白苔

**腹診：**



腹力は中等度以上で右にハッキリした  
胸脇苦満、臍上悸を触知。

**参考：** 服用薬（ニトロールR、バイアスピリン、メインテート、  
レニベース、ワーファリン、リポバス、ベブリロール）

### 漢方的診断

病位・病期	少陽病、半表半裏
病勢	実証
薬方	柴胡加竜骨牡蛎湯



## 症例 2

**経過**：以上と腹証より、柴胡加竜骨牡蛎湯加・根3.0、黄連1.5を煎じ薬で投与した。

二週後に来院。漢方薬服用後3日目頃より脈拍数も80/90分となり胸苦しさ、不安が大部とれ、現在は気分が落ち着いてきた。血圧136/80、脈は結代（心房細動）しているが68/分。

四週後、心電図上の心房細動は持続しているが胸苦しさ、不安はなくよく眠れるという。以後平成×年12月まで継続して心身状態良好な為、廃薬とした。



## C : 加味逍遙散 加味

### 症例 4 平〇〇子 74才 女性

主 訴 : 動悸、易疲労、血圧上昇

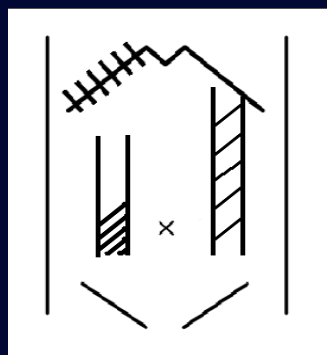
現病歴 : 平成×年10月中旬、色々な事が重なり非常に疲れた事がありその頃より以前はむしろ低かった血圧が時々急に上昇するようになり息苦しさ、動悸が生じて2階にあがるのも苦しくて出来なくなかった。居住地の大学病院で検査を受け虚血性心臓病、心不全と診断されニトロールRやバファリンの投薬を受けるも全く改善しない為、翌年、1月7日当院を受診した。



## 症例 4

**現症：** 体格、栄養状態は中等度だが、顔色は青白く不安でいかにも苦しそうな顔貌。食欲、二便、睡眠は変化なし。脈拍96～100/分、沈弦細、舌診、紅舌、無苔、乾 血圧172/100

**腹診：**



腹力やや弱く、右に軽度の胸脇苦満。臍上～傍に悸、胃内停水、右下腹部に瘀血と思われる圧痛

**漢方的診断**

病位・病期

少陽病、虚勞、瘀血

病勢

虚証

薬方

加味逍遙散





## 症例 4

**経過**：以上より、加味逍遙散加竜骨2.5、牡蠣2.5、釣藤3.0、人参3.0を煎薬で投与した。

2週後來院。「びっくりする位、効いた」動悸も息切れも全く無くなった。便秘すると言うので、大黄甘草湯エキス1.0gを就寝前に追加した。血圧146/80

6週後、全く普通の生活をしている。血圧146/78

12週後、中国に旅行にいきたいと言うので、エキスで加味逍遙散7.5g合桂枝加竜骨牡蠣湯7.5gを処方。

16週後、中国から無事帰国、全く問題なし。希望により現在まで継服中である。



## C : 加味逍遙散 加味

### 症例5 阿〇ト〇子 74才 女性

**主 訴** : 悲傷、不安、不眠、頭冒感、耳閉感

**現病歴** : 一昨年、息子の嫁が癌で死亡した。その後、息子と孫と同居し面倒をみるようになったが、息子はやる気を失いうつ病となり孫はぐれて言う事を聞かなくなったため、急に生きているのがつらくなりよく泣くようになった。食欲もないし安定剤を服用しないと全く眠れない。下肢が冷え、下腹が張って子宮の下垂感があると言って平成×年4月23日来院した。

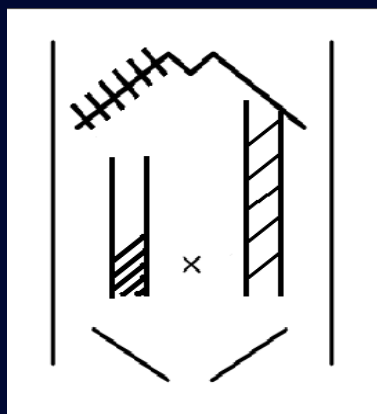


## 症例 5

**現症：** やややせ型で、悲しそうで疲れきった顔貌。  
 やや便秘がちで食欲は不良。

脈拍88/分、沈弦細、血圧130/76

**腹診：**



腹力やや弱く、右に軽い胸脇苦満。  
 振水音、臍上～傍悸、右下腹部に  
 瘀血と思われる圧痛。

山田光胤流 胃底は臍下3.5横指

**漢方的診断**

病位・病期

病勢

薬方

少陽、太陰併で虚勞、瘀血、気うつ  
 虚証

加味逍遙散合香蘇散



## 症例 5

**経過**：以上より、加味逍遙散合香蘇散加人参3.0、酸棗仁4.0、附子1.0を煎じ薬で投与した。

2週後來院。悲傷感や泣きたくなる感じは少しずつ改善している。食事は大部味が出てきた。睡眠は安定剤服用しなくても4～5時間は眠れる。

6週後、うつ的症状は大部良いが家事は立ち仕事が多いので子宮の下垂感が一番苦になると言う。

前方に升麻2.0を昇提の意味で追加した。

8週後、子宮の下垂感は大部良い。

12週後、人間に戻ったようだ。子宮の下垂感改善。本人の希望により、継服中、現在まで経過良好。



# 柴胡加竜骨牡蛎湯① 出典 傷寒論

A. 「傷寒八、九日 これを下し胸満、煩驚し、小便不利し、せん語し、一身尽く重く転側すべからざる者」

B. 失われた処方（山田光胤 著『漢方処方応用の実際』から）

- ・ 現在使用されているのは傷寒論本来の処方ではなく外台秘要の処方である。
- ・ 康平本では又方としてあげてある。
- ・ 和田東郭、吉益南涯 大柴胡湯に竜骨・牡蛎。
- ・ 尾台榕堂「類聚方広義」で、この方は甘草、黄・がぬけている。小柴胡湯の加味方だ。
- ・ 湯本求真「皇漢医学」小柴胡湯に竜骨、牡蛎、鉛丹、桂枝、茯苓、大黄を加えたものだ。
- ・ 山田光胤先生「本方については昔からいろいろ問題があるが、現在用いられている外台秘要の処方で充分効果があるから実際にはこれでよい。原方には鉛丹が入っているが大塚氏の流涎がひどくなった経験から現在はこれを除いている。」



## 柴胡加竜骨牡蛎湯②

餐英館療治雑話 目黒道琢

- ・ 比方癩症並に癩症に用いて有効のこと。傷寒類方に見えたり。偕、当今の病人、疝氣と氣滯と肝うつと三証の病人10に7、8なり。肝うつ久しければ癩症となる。婦人別して肝うつ並に癩症多し。この場を識得理會すれば当今の雑病を療するに難かしからず。



# 柴胡疏肝湯 統旨（医学統、旨、明、葉文齡撰）

勿誤藥室「方函」「口訣」釈義 長谷川弥人 著

- ・ 左脇痛を治す。肝経邪を受くるが為なり。
- ・ 四逆散方中に莎草、川・、青皮を加う。
- ・ 『医通』（清、「張氏医通」張玉路 撰）  
梔子、煨姜煨姜有り、柴胡疏肝散と名づく。  
脇痛、血、上に菟するを治す。
- ・ 此の方は四逆散の加味ゆえ、脇痛のみに限らず四逆散の症にして肝気胸脇にうっ塞し、痛を覚え、或は衝逆して頭疼、肩背強急する者を治す。

「医通」の方は瘀血ありて痛をなす者に宜し。

※煨姜（わいきょう）中医臨床のための中薬学より

- ・ 生姜を紙に包み熱灰中で蒸し焼きにしたもの
- ・ 生姜より辛散の力は劣るが、温中止嘔の効能が強いので、胃寒の嘔吐、腹痛、下痢に用いる。



# 逍遙散 局方

勿誤藥室「方函」「口訣」釈義 長谷川弥人 著

- ・「血虚勞倦し、五心煩熱し、頭目昏重し、心忪き、頬赤く、発熱盜汗あるを、及び血熱相博ち、月水調わず、臍腹張痛し、寒熱瘧の如きを治す。」
- ・此の方は小柴胡湯の変方にして小柴胡よりは少し肝虚の形あるものにして医王湯よりは一層手前の場合にゆく者なり。
- ・此の方、専ら婦人虚勞を治すと言えども其の実は、体気甚だ強壯ならず、平生血気薄く、肝火亢り、或は寒熱往来、申分たえず、或は小便淋瀝渋痛、一切肝火にて種々申分あるものに効あり。『内科摘要』に牡丹皮、山梔子を加うる者、肝部の虚火を鎮むる手段なり。





# 抑肝散①

## 撮要

勿誤藥室「方函」「口訣」釈義 長谷川弥人 著

- ・「肝経虚熱、発搐し、或は発熱咬牙、或は驚悸寒熱し、或は木土に乗りて嘔吐、痰涎、腹脹、少食、睡臥安からざるを治す。」
- ・此の方は四逆散の変方にして凡て肝部に属し筋脈強急する者を治す。四逆散は腹中任脈通り拘急して胸脇の下に衝く者を主とす。此の方は左腹拘急よりして四肢筋脈に攣急する者を主とす。此の方を大人半身不遂に用ゆるは東郭の経験なり。半身不遂並びに不寐の証に此の方を用ゆるは心下より任脈通り攣急動悸あり、心下に気聚りて痞する気味あり、医、手を以って按ぜば左のみ見えねども病人に問えば必ず痞と云う。



# 抑肝散②

## 撮要

勿誤藥室「方函」「口訣」釈義 長谷川弥人 著

- ・ 又左脇下柔なれども少筋急ある症ならば怒気はなしやと問うべし。若し怒気あらば此の方効なしと云うことなし。又逍遙散と此の方とは二味を異にして其の効同じからず。此処に着目して用ゆべし。



## 終わりに

これからの西洋医学は色々な先端科学の知識や技術を取り入れて今まで以上に細分化され分析的かつ分子論的に発展していくと予想される。

こういう時代にあって個人の心は不安と抑うつと解消されない怒りとで一部の恵まれた人達を除いて「総肝うつ」の状態がつづきそうである。

そんな中で漢方こそ心身一如の立場から患者さんを総合的に診、又治療出来る医学として是非後世に伝えていくべきだと信じている。

\* 続いて精神性疾患について





# 精神性疾患

大分市 織部内科クリニック  
織部 和宏



尾台榕堂(おだいようどう) (1799~1870)

幕末日本漢方医界の巨星

「類聚方広義(るいじゅほうこうぎ)」

## 陽性症状一実証

### A 柴胡加竜骨牡蛎湯条 頭註にて

- ①狂症、胸腹の動甚しく、驚懼人を避け、兀坐して独語し、昼夜寐ず、或は猜疑多く、或は自死せんと欲し、床に安んぜざる者を治す。
- ②癩症にして時々寒熱交作り、鬱鬱として悲愁し、多夢少寐、或は人に接するを悪み、或は暗室に屏居し、殆んど労瘵の如き者を治す。  
この場合の癩症：万病回春で言っている意識の昏乱、狂叫、奔走の病症をさしている。
- ③癩癩、居常胸満上逆し、胸腹に動あり、毎月二三発するに及ぶ者は、常に此の方を服し懈らざれば、則ち屢発するの患無からん。



## B 白虎湯

### 頭註

狂症眼中火の如く、大声妄語し、放歌高笑し、屋に登り垣を踰え、狂走して已まず、大渴引水し、昼夜眠らざる者を治す。加黄連。又、日に灌水法を用いる。（興奮を去る効あり）

## C 大承気湯

### 頭註

狂症、大言罵詈し、昼夜眠らず飲痰常に過ぎ胸腹満ち、大便せざる者

## D 三黄瀉心湯

### 頭註

癩家（精神不安定で癩の強い人）、鬱鬱顧忌（人に会うことを嫌う）多く、毎夜睡らず膈中跳動し、心下痞し、急迫する者。

## E 桃核承気湯

経閉し、上逆発狂し、或は吐血衄血、及び赤白帯下、小腹急結し、腰腿攣痛する者を治す。



和田東郭

## F 治狂一方

大承気湯合三黄瀉心湯加一角  
発狂の劇症に用いる。

本間研堂

「平人卒然として妄語狂乱、自ら狐狸の憑る所と為すと称す。」—狂癩の一証。

本朝老医伝

## G 治血狂一方

- 四物湯加乾姜、紅花、大黃、桂枝
- 血狂＝瘀血が原因で精神異常を来した病
- 血狂は大抵、三黄瀉心湯、桃核承気湯にて治する者なれども数日を経て壞病になりたる者は此の方に非ざれば効を収め難し。桃核承気湯に荊芥を加え、荊桃核承気湯と称す。月経なく狂状をなす者に使用。ヒステリーではない。



## 陽性症状一虚証

### A 甘麦大枣湯

#### 原文一金匱要略

「婦人、臆躁（＝ヒステリー）、喜悲傷して哭せんと欲し、象（かたち）神靈の作す所の如く数（しばしば）欠伸す」

#### ○類聚方広義 頭註

孀婦室女、平素憂鬱無聊にして、夜夜不眠等の人に、多く此の症を発す。発すれば則ち悪寒発熱し、戦慄錯語し、心神恍惚、居（つね）に席に安んぜず、酸泣（悲しみ泣くこと）已（や）まざるは、此の方を服し立ちどころに効あり。又癩症、狂症にて前症に髣髴（ほうふつ）たる者も、又奇効あり。

○子供のチック症に大変よく効く。

#### ○藤平健氏

適応 ヒステリー、夢遊病、小舞踏病、チック症、小児夜啼病、泣き中風、笑いやまない者、てんかん、憂鬱病、不随意運動、あくび連発





## B 抑肝散

矢数道明先生著「臨床応用、漢方処方解説」

神経症で刺激症状が激しく、一般に癇が強いと言われているが、その興奮を抑え鎮静させるところから名付けられた。

※ 保嬰撮要の急驚風門が出典である。

本来は小児のひきつけに用いられた。肝気が亢ぶって神経過敏となり、怒りやすく、いらいらして性急となり興奮して眠れない者。左の脇腹が拘攣して、突っぱり、四肢の筋脈が攣急する病気。

### 応用

癇症、神経症、ヒステリー、夜啼、不眠症、癇癢持ち、夜の歯ぎしり、てんかん（加・薬、厚朴）

脳卒中、神経性斜頸等

チック、注意欠陥多動症、眼瞼痙攣、手指Tremor

### 大塚敬節先生コメント

癇がたかぶって怒りやすい人、筋肉がひきつれたり、ふるえたりする者に用いることが多い。

最近では認知障害の陽性症状、レビー小体病に頻用される。



## C 加味逍遙散

矢数道明先生

「婦人一切の申分（訴え、神経症状の訴え）に用いてよく効く。」

「月経が不調になって熱のふけさめがあり、午後になると逆上して両頬が赤くほてる。又婦人の性質が肝気亢り易く（怒りやすく神経質になって）嫉妬深く、火気逆衝して顔面赤く皆つり上り、発狂でもしかねまじき症によい。男子でも肝癩持ちに用いて良い」



# 治験症例 吉益東洞「建殊録」より

- ①某生徒、読書苦学す。かって発憤する所あり。遂に机によりて寝を廢すること七昼夜、已みて独語し、妄笑す。前儒を指摘し罵(ののし)りの口絶えず。久之(きゅうし)(しばらく)して人、其の狂疾を覚え先生之れを診す。胸肋妨脹し臍上に動あり、上気して降りず。柴胡桂枝乾姜湯となし之れをのませり。数日して全く常に復せり。
- ②京師の人、某の妻。喜(しばし)ば憂恚(けい)(うれい、怒る)す。甚しければ則ち罵詈(ばり)、口に絶えず。此くの如き者十有余年。某医之れを瘳(りょう)せしが其の効無く更に先生をむかえて診治を求めたり。先生之れを診すれば、心胸煩悶し口舌乾燥し水を飲ませんと欲す。石膏黄連甘草湯を作りて之れを飲ませり。数月にて諸証皆除かる。



# 治験症例 吉益東洞「建殊録」より

- ③越中の医生某の男。年三十所(ばかり)。狂を発し喚叫、妄走し、水火を避けず。医生すこぶる某の術を尽くして之れを救わんとす。一に其の効無し。ここにおいて先生の名を聞き、詳しく証候を録し、懇に治方を求む。其の略に曰く、「胸膈煩悶し、口舌乾燥し、水を飲まんと欲すること休む時なし。」と。先生すなわち石膏黄連甘草湯となし之れを贈る。百有余劑を服して全く常に復す。
- ④大炊相公(食糧大臣)の臣、田太夫、憂慮過多、久しくして熱うつ生じ、四肢重だるく志氣錯越(気持ちが乱れ落ち着かない)して居常安からず。灸刺、諸薬並びに効無し。先生之れを診し・薬甘草附子湯を作りて之れを飲ましむること数十日、~而して全く常に復す。



## 治験症例 吉益東洞「建殊録」より

⑤京師智恩街の紙舗、政右衛門なる者。病後怯（きょう）悸（おびえ）心中跳動す虚勞証）し、障戸の響きを畏れ、其の抵触する所は、皆紙條を粘りて之れを防ぐ。居常飲食に味無く百事、皆廢す。然れども行歩を妨げず、但だ橋梁に遇えば則ちカゴに乗りてなお過ぐる事能わず。百治効無し。此の如きこと凡そ三年。先生之れを診すれば上気殊に甚しく胸下拘満し、胸腹動あり。心中安からず。苓桂朮甘湯及び・黄散を作りて之れを飲ませり。数日して上逆稍減じ又柴胡桂枝乾姜湯として之れを飲ませり。数ヶ月諸症皆除かる。



# 東洞先生配剤録

## ①柴胡桂枝乾姜湯

年三十有八。十五年以って患を遷(か)えす。上衝し、氣塞がり胸膈煩悶して時々盜汗出で心気うつ悒(ゆう) (こころがふさぐ) して定まらず、舌根強ばり、目胞に虫の蠹(しゅん)行(虫がごそごそ動いてゆくさま) するが如きを覚え大便或いは瀉し、或いは結し、小便或いは清利し或いは濁り、飲食故の如くと言えり。

## ②大柴胡湯

年二十有二。十三年以前より常に頭痛し時に目眩す。其の症、既に癒ゆれど三年して以って還り、世に謂う所の「てんかん」を患う。発すれば則ち氣將に絶せんとす。大抵一月に十発す。



# 東洞先生配剤録

## ③乾姜黄連黄芩人参湯

年二十有七。幼きより弱く汚穢(わい)、不浄を忌むこともっとも甚だし。若し之れを見れば則ち洗いて止まざることなし。

## ④柴胡桂枝湯

年十有八。五年前より常に頭眩す。以後世に謂う所のてんかんを患うなり。発すれば則ち上衝し、大抵春秋に二発す。

相見三郎先生はこれにヒントを得たのか、てんかん例に柴胡桂枝湯の芍薬を倍量して使用して著効を得ている。

参考：東洞は薬徴、腹診所見に基づいて方剤を決定している。



# 東洞先生配剤録

## ⑤桂枝加朮湯 ⑥小柴胡湯

年十三。四年前よりいわゆる癩疾を患う。其れ発するや日に再燃し或いは間(ま)十日に三発し、或いは三十日にして発す。発すれば則ち牙関緊急、上視し搖擲して口に涎沫を吐し人事を知らざる者、久しくして之れすなわち蘇ると言えり。

## ⑦大柴胡湯

年五十五。今春来、狂を発し、日一日に従りて甚だし。以来、大便秘訣す。

## ⑧小柴胡湯

年二十八。三年前より夜寝て一声を発し直視し、失漚(そう)し、口に涎沫出で乃ち人事を知らず、頃刻(けいこく)(しばらくの間)、故に復す。寝ても亦常の如し。其の発するや、二三夜毎と言えり。





# 特殊療法

## 中神琴溪

○灌法（身体に冷水をかけたなり水につけたりする治療法）

京都の人達が、発狂した人を岩倉などに連れて行き滝に打たせる事がある。

### 症例① 大津土橋町 木屋利助

発狂して走りまわり支離滅裂な事を言っていた。医薬も祈祷も効果がなかった。二十日間便秘していた。三黄瀉心湯服用させ灌水を行った所、まもなく平常に戻った。

### 症例② 京都三條通り 真覚寺の住職

気分が憂鬱で何ごとにつけても不安になり、精神が安定しなかった。灌水でまったく正常に戻った。

### 症例③ 子供

毎日、昏暈して目がつり上がっていた。いろんな医者が「ひきつけ」の治療をしたが治らなかった。大きなタライの中の水に浸して全快した。



## 中神琴溪 生々堂治験

①近江大津の人がやってきて、「私には十六才の娘がいる。変わった病気がある。毎夜十一時頃になると家の者が熟眠するのを待って、密かに起きて舞を舞う。午前五時頃には踊りをやめて寝てしまうという事を毎夜くり返す。一晚ごとに踊る曲が変わる。朝になると日常の動作も飲食もいつもと変わる所なし。娘は自分では気がついておらない」

「それはおそらく狐惑病だ」甘草瀉心湯で数日して完治した。

②一婦人 米びつの中に猫がいるとも知らず、うっかり蓋をしてしまった。二三日して蓋をあけると飢えた猫が眼を怒らせて婦人を脅しそして走っていった。婦人はたいそう恐れて震えた。それから病気になり、婦人の泣き声や動作が猫のようになった。甘草瀉心湯を与えて治した。

コメント 甘草瀉心湯は半夏瀉心湯に甘草を余分に入れて作る。



## 陰性症状ー抑うつ症状

- 香蘇散           ▪ 半夏厚朴湯
- 帰脾湯   ⇔   竜骨湯
- 抑肝扶脾散 エキスなら四逆散合啓脾湯

世の所謂、神仙勞（神経性食思不振症）なる者はこの方を与える。

- 反鼻交感丹料 本朝経験方

茯苓、香附子、反鼻（マムシ）、乾姜

「健忘甚しき者、或は癡狂後、放心して痴騃（がい）（愚か者）になる者、又は癩うつして心身快々して楽しまざる者を治す」

症例（浅田宗伯、「勿誤藥室「方函」「口訣」より

牧野候、癡狂後、心気うっ塞、語言する能はず、殆ど（痴）＝癡人の如し。此の方を服すること一日余り、一夜、東台博覧会開館の花火を見て始めて神気爽然、平に復す。

反鼻揮癸の功、称賛すべし。





ご清聴ありがとうございました。

